

第8講 イオニア反乱の拡大と終焉

前499年 スパルタとアテナイへの支援要請

アリスタゴラスによる反乱の正当化＝後世の対ペルシア観に影響。さらにはオリエンタリズムの源流。

- 1) バルバロイという言葉の創作
- 2) アジアの空間的広がり
- 3) アジアの物質的豊かさ
- 4) アジアの柔弱さ
- 5) 血のつながりによる同族意識の強調
- 6) 解放戦争という理念の創造

スパルタ王クレオメネスの拒否

アテナイ民会の承認

前498年 アテナイおよびエレクトリアからの援軍派遣

(=禍々しきことの原因)

サルデイスへの進撃とアクロポリス包囲

途中ペルシア軍と遭遇せず

ペルシア人たちはアクロポリスに籠城

包囲と失火。キュベレー神殿の焼失

→ペルシアに報復の口実

ペルシアの反撃とエフェソス近郊の戦い

アテナイはイオニアの反乱から手を引く

反乱の拡大：ビュザンティオン・カリア・キプロス

前497年 キプロスでのペルシアの反撃（～前496年）

カリアでのペルシアの反撃

ヘッレスポントスでのペルシアの反撃

アリスタゴラスの逃亡と死

ヒスティアイオスの逃亡←アルタフェルネスとの確執

(ラデ海戦後、捕えられ処刑)

前494年 ラデの海戦：イオニア人の敗北

ミレトスの破壊と住民の強制移住

ペルシア戦争のプロトタイプとしてのイオニアの反乱の評価

1) プロパガンダとしてのヘレネスとバルバロイの対立の構図

自由と隷属

血縁関係の強調

同族としての使命

アジアの領域的広大さと豊かさの強調

アジア人の軍事的無能力

解放戦争としてのイオニアの反乱

2) ギリシア人のペルシアに対するパターン化された対応

イオニアの貴族間の権力闘争

追放された僭主を通じてのパイプの温存

同盟の構造的な弱さ

弱体なリーダーシップ

ギリシア民族主義のプロパガンダ構築

統一された行動を維持できない。結果として個別に抵抗し、各個

撃破される

イオニア人に対する差別的感情の存在

アイオリス人やドーリス人の冷淡な対応

ギリシア本土との連携の希薄さ